

「教育ゲームにおける学力の主観的認知完了による勉強期待」 仮説

10年後データによる検証

鹿児島大学 桜井芳生

1 目的

桜井 (2010) (前稿) は、日本敗戦後社会における格差と教育について一つの仮説を提起した。「教育ゲームにおける、学力の主観的認知完了による勉強期待」仮説、である。もしこの仮説が成立していると、時代が経るにつれて「収入・職業威信などを統制したうえでの、本人学力→子どもへの教育意識」の影響力の強さは増加する、という反証可能な予測をたてることができる。このたび「10年後」データを入手し、この予測を確かめた。予測に即した結果を得た。最後に、数点にわたって、このアプローチの今後の課題を指摘した。

2 方法

敗戦後日本社会において、時代が経過するにつれて、「「うちの学力は、まあ、こんなものだろう」という主観的認知が進行し、それに応じて（学力が高いならそれだけ高く、低いなら無理して勉強しても割にあわないのでそれほど高くなく）、子どもにも勉強を期待する」とでもいうような、「教育ゲーム」における「学力」の主観的認知が、完了に近づき、それに応じて親が期待する子どもの「勉強」の度合が影響された」と仮説した。この仮説を「教育ゲームにおける、学力の主観的認知完了による勉強期待」仮説、と呼んでみよう。SSMのデータで重回帰分析を試みた。

3 結果

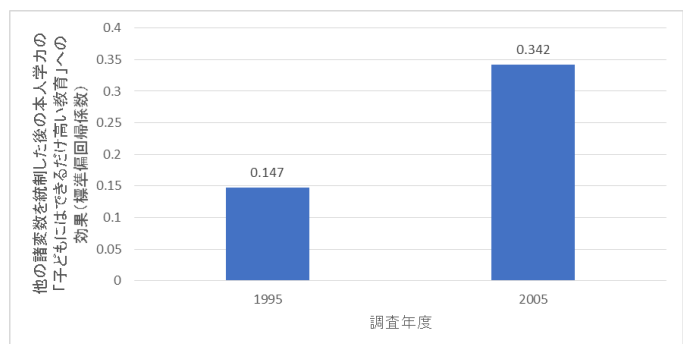
ただし、桜井 (2010) 執筆時には「95」のみ公開されていたため、前稿での分析は以下のような限定されたものにとどまった。まず、従属変数として「子供に高い教育をうけさせるのがよい」という意見への賛否を採用した。問・答は以下のとおり、「問 42 [回答票 35] 子どもの教育について次のような意見があります。それぞれについて、あなたはどのように思われますか。1(ア)そう思う 2(イ)ややそう思う 3(ウ)あまりそう思わない 4(エ)そう思わない 9 わからない」。本人の「学力」(合成変数)、さらに性別、年齢、世帯収入、職上威信らを統制変数とし、上述の問い 42「子供に高い教育を」を従属変数とする線形重回帰分析をおこなった。そこにおける本人学力の「子供に高い教育」をにたいする標準化偏回帰係数は「.147」であった。

前稿発表後、10年後のSSM05のデータが利用可能になったので、全く同様な分析をしたところ「本人学力の「子供に高い教育」を」にたいする標準化偏回帰係数は「0.342」であった。

4 結論

当初の「「本人学力→子どもへの教育意識」の影響力の強さは増加する」という予測どおりであった。最後に本アプローチの限界点とその克服方途を議論した。

文献 (End note 使用. SIST 02-2007 形式による) 桜井, 芳生. 2010 「教育ゲームにおける、学力の主観的認知完了による勉強期待」仮説. 研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集. vol. 4, no. 1. /SSJ データアーカイブから個票データの提供を受けました。関係者に感謝いたします。



yoshiosakuraig@gmail.com